勤務医部会だより

医療における「自閉化」問題

幹事　**早川文雄**
（岡崎市民病院　院長）

新型コロナウイルスの感染拡大が少し鎮静化した頃、NHKラジオが沖縄の美ら海水族館前で取材したインタビューを放送した。アナウンサーが、観光客らしき10歳前後の男の子に「ボク、どこから来たの？」と聞いたところ、男の子は「ホテルから～」と答えた。その返答自体は間違っていないが、「？」という違和感は否めなかった。次にインタビュアーは「どんな魚が好き？」と聞いた。この水族館はご存知のとおり、ジンベイザメやマンタが有名だから、当然そういった回答を期待したであろうところ、男の子は「マグロ～！」と言ってのけた。運転中にそれを聞いていた私は、思わず「寿司ネタか！」とツッコンでしまった。

会話そのものに齟齬はないものの、我々が抱く違和感は、取材を受けた男の子が質問を字義どおりに捉えたことによる。ホテルから来たのは事実であろうが、聞き手はどの地に住む観光客なのか知りたかったに違いないこと、好きな魚は？と聞いた記者の真意は水族館の前だけに、観賞したい対象を聞きたかったに違いない。しかし彼は、そういった聞き手の意図を斟酌することなく、質問を言葉どおりに解釈して「ホテルから～」「マグロ～！」と答えたのだ。相手の意図を正しく量れない理由を「イマジネーションの障害」と呼び、行間や文脈を読み取れず字義どおりに解釈することによる「コミュニケーションの障害」と相まって、自閉症スペクトラム（以下、「自閉」と略）の特徴とされている。

「自閉」はこれまで「発達障害」の一型に位置づけられてきたが、「障害」という用語の不適切さを反省し、小児神経の領域で最近は「神経発達症」と呼ぶ概念のひとつであり、「神経発達症」は標準的な高次脳機能の保有者からすると偏った性格や行動の特性を有した少数派を意味する用語である。「自閉」は著しいこだわりや感覚の過敏さを持ち合わせることでも知られており、子どもの世界ではいじめや不登校、長ずると強迫性障害や引きこもり等に関係する概念である。バロン・コーエンという大家が、「自閉」脳とはシステムに強く、対人関係が苦手なsuper male brain（超男性脳）だと説いており、文系的な曖昧さは苦手で、コンピュータのような機械的正確さを特徴とする理系脳と解説している。歴史上の偉人や有名人が「自閉」の特性を有していたエピソードはいくつもあるが、現代社会においても高学歴やエリート層で「自閉」率が高いとされている。「負けたくない」「一番になりたい」こだわりは、他人より秀でるために欠かせない特性であり、合理性に富んだ思考の明晰さがハイクラスに押し上げる要因のひとつとされている。

医学科に合格しないと資格が取れない医師は高偏差値職種の最たるもので、「自閉」医師が多くの割合を占めるのは必然である。システムに強く、治療や研究成果にこだわりを持った名医がこの特性を飛躍のバネにしている姿を多く見うけるが、患者やスタッフとトラブルが絶えない医師にコミュニケーション不良や社会性の不器用を見ることも多い。また、患者に寄り添うことが求められる看護師が高学歴化し、近年の大卒看護師の増加と相まって共感やコミュニケーションが苦手な看護スタッフが増えている現象も看過できない。

昔と比べ、患者と医療者が緊張関係に陥ることが少なくないのは、こういった医療者側の変化ばかりが原因ではない。前掲した挿話のように、一般人においても「自閉」特性を持ち合わせていることが決して珍しくないため、恵まれた社会性や良好な会話術を持ち合わせた人が少なくとも片方にいないと、緊張場面を作り上げる潜在的な要因が揃ってしまう。とくに行間を読まず、字義どおりにしか捉えられない者同士が文章だけでやりとりするメールやSNSに至っては、この上なく危険である。医療界全体が社会現象として「自閉」化を受けとめて理解し、そういった前提で役割分担の見直しや対人スキル向上の手段を獲得していく必要に迫られている。

（参考文献：共感する女脳、システム化する男脳　バロン コーエン　NHK出版）